

令和８年度 第１回浜松市立高等学校の在り方検討委員会

開催日時：令和８年７月１３日（月） 午後２時から午後４時まで

場 所：教育委員会 教育委員会室

出席者：「浜松市立高等学校の在り方検討委員会委員」

野秋 愛美 （教育長・委員長）
加藤 俊志 （横浜国立大学大学院 教授）
亀井 暁子 （静岡文化芸術大学 教授）
鶴見 英人 （遠州鉄道株式会社 人事部長）
守屋 謙一郎（浜松市立高台中学校 校長）
宮崎 正 （浜松市立高等学校 校長）
須賀 淳子 （浜松市立高等学校同窓会 顧問）

出席者 <オブザーバー>

大津 裕美 （浜松市役所企画調整部 教育・若者連携推進担当課）
鈴木 利昭 （浜松市役所産業部 労働政策課長）
鈴木 純一 （浜松商工会議所 会員支援部長）
深津 正樹 （浜松商工会議所 会員支援部 人材支援課長）

議事内容：

- １ 開会
- ２ 教育長挨拶
- ３ 委員紹介・副委員長の選出
- ４ 浜松市立高等学校の在り方検討委員会の協議予定
- ５ 説明
浜松市立高等学校の現状
- ６ 協議
（１）浜松市立高等学校の存在意義について
（２）これからの浜松市立高等学校が目指す姿にについて
- ７ 閉会

(鈴木教育総務課長)

ただいまから、令和8年度第1回浜松市立高等学校の在り方検討委員会を開催いたします。はじめに、野秋教育長からご挨拶いたします。

(野秋委員長)

本日はお忙しい中ご出席くださりましてありがとうございます。

政令市である本市には、県内の市町の中でも多くの県立高校が存在します。本市唯一の市立の高等学校として、120年を超える歴史と伝統を誇る浜松市立高等学校があります。

私自身は浜松で生まれ育ちました。それから浜松の中学校教員として勤めておりまして、県立高校、浜松市立高校のことは知っているつもりでおります。ただ、これらの高校は当たり前存在しているものと、ずっと思ってきました。価値も、そして子供たちが高校に求めるものも、進路指導をしている中で、当たり前存在している、そして存在し続けるものと思ってまいりました。それだけ安定的に公立高校が存在し機能しているのがこの浜松市です。

しかし、近年、社会の変化がめまぐるしく、予測不可能な状況が続いております。少子化に加えて、いわゆる私学の無償化も始まって公立高等学校の教育は、現在大きな岐路に立たされていることを認識せざるを得ません。全国的なニュースを見ると、「生き残りをかけて、公立高校の再生を」などの見出しがおどっています。

そうした中、文部科学省では、高校教育改革に関する基本方針、「2040年に向けたN-E.X.Tハイスクール構想」を示しました。静岡県でも、「県立高等学校のあり方に関する基本計画」が示されて、計画に基づいて西遠地区でも昨年度グラウンドデザインを作成しました。

では、120年の歴史を誇る浜松市立高等学校はどうかというと、当初、女子高からスタートしましたが、共学へ変化し、その後も各方面で活躍する多くの卒業生を輩出して、現在も多くの志望者を集める人気のある高校として存在し続けています。だからこそ、先ほど申し上げたような影響を直接的に受ける前に、時代がどう変化しようとも、持続可能に発展し続け、選ばれる市立高校に向け、今後のあり方を検討することに意義があると感じます。予測困難な社会に対応するための教育への質的転換、更なる魅力化、特色化の方向性、これらを議論していただきたく、本委員会を設置することといたしました。

本日は、皆様の深い専門的知見や、現場でのご経験に基づいた多様な視点から、忌憚のないご意見、ご提言を賜りたいと思います。

この委員会での議論が将来にわたって、浜松市立高等学校が本市のシンボルとして誰からも愛され続ける学校であり続け、ひいては浜松市のさらなる魅力

化に繋がることを期待して、開会にあたっての挨拶といたします。よろしくお願いいたします。

（鈴木教育総務課長）

続きまして委員の皆様から一言ずつご挨拶をいただきたいと思います。

（加藤委員）

横浜国立大学の組織が新しくなり、初等中等教育推進本部の教授、教職大学院の教授、教育学部教育デザインセンター教授、附属学校の鎌倉の小学校と中学校の校長を兼務しております。大学では、主に大学院生の授業を担当しています。将来的に指導主事や管理職を期待されている現職の先生方対象の授業を持っています。

まずは横浜国立大に浜松市立高校から優秀な生徒を送っていただきまして誠にありがとうございます。

今、大学で教えていますけれども、元々は高校籍で、県立高校の教員をやっていました。私は国語科ですが、国語の授業、高体連ラグビー専門部長、最後は校長を3校経験し、直近で横浜翠嵐の校長をしていました。浜松市立高等学校の在り方検討委員会ということでお誘いいただき、どれくらいお力になれるかわかりませんが、神奈川の高校改革にも関わってきましたので、私の知っているところでご助言できたらと思っています。

（亀井委員）

私は現在、静岡文化芸術大学のデザイン学部で建築系の教員をしており、学生に建築設計を教えたりであるとか、建築系の教育施設の研究をしております。現在の職場に来るまでは、設計事務所で設計者として教育施設に携わっておりましたので、お役に立てること、お力になれることがあればと思い臨ませていただいております。

（鶴見委員）

私は人事に携わって5年ぐらいになりまして、採用育成も担当しておりますので、いままでも市立高校の卒業生の皆さんを本当に多く採用させていただきました。

その前は不動産事業の方も経験させていただいております。

また、プライベートでは今年浜松北高校のPTA会長をやっておりますので、学生の親の目線というのも合わせて発言をできればと思っています。

(守屋委員)

中学校から見て、魅力ある高等学校、という視点で発言をさせていただけたらと思っております。

私が中学生の頃はまだ女子高でしたが、男女共学になって魅力がさらに上がって人気がある高校と思います。それでも倍率の変化を見ると下がってきているところもあり、今の高校改革の波は近くまできていると感じております。この委員会で勉強させていただきながら、意見をお伝えしたいと思っております。

(宮崎委員)

浜松市立高校の校長になり今年2年目になります。私は先ほどの教育長と同じで、義務教育中心、教育行政を中心にこれまで勤めてまいりました。高校教育は昨年度からということで、新鮮な気持ちで勤務しています。

私は、現在の実際の高校の状況をできるだけわかりやすく提案をしていきたいと思っております。

(須賀委員)

私は同窓会長を5月の総会まで、10年務めさせていただきました。コロナ禍を挟んだため、規約の改正など状況がいろいろ大変となり、思いがけず長く務めることになりましたが、この5月で新会長にバトンタッチできました。顧問という立場ですが、この会に出させていただくことになりました。

(鈴木教育総務課長)

本日は、オブザーバーとして、浜松市役所より企画調整部企画課教育・若者連携推進担当課長、産業部労働政策課長、浜松商工会議所会員支援部長、同じく人材支援課長に出席いただいております。

ここからの進行は、野秋教育長にお願いします。

(野秋委員長)

最初に副委員長の選出をさせていただきます。資料1「浜松市立高等学校の在り方検討委員会設置要綱」の第5条。こちらにありますとおり、委員長は教育長、そして副委員長は委員長が指名する」となっております。そこで横浜国立大学の加藤先生にお願いしたいと思っております。よろしくをお願いします。

それでは次第に沿って進めてまいります。「4 令和8年度浜松市立高等学校の在り方検討委員会の協議予定について」説明をお願いします。

■資料2説明（鈴木教育総務課長）

(野秋委員長)

何か委員の皆様から確認したいことはありますか。

では次第に沿って、「5 説明」に入ります。「浜松市立高等学校の現状」について、教育総務課より説明をお願いします。

■資料3 説明（鈴木教育総務課長）

(野秋委員長)

学校側から追加事項はありますか。

(宮崎委員)

学校側からは、特に変更はありません。文武両道ということで、進学実績もしっかりしている中、公立高校でありながら部活動等も運動部に限らず文化部も大変レベルの高い位置で維持をしていることも、このアンケートでも出てきたように、本校の校風が生み出している。人間性も、やはり脈々と受け継がれているかと思います。伝統の中で、例として校門で一礼をするという伝統が、きちんと受け継がれている。伝統も重んじる雰囲気もある学校であると思います。加えて、課題の中で本市の唯一の市立高校ということで、この強みや独自性というのは、正直まだまだ出せるという感触があります。現在でも良い学校であるとは思いますが、さらに伸びる可能性があると感じています。

(野秋委員長)

では、ここから皆様のご意見を伺っていきたいと思います。1点目の協議事項は、「市立高等学校の存在意義について」です。先ほどの事務局の説明、校長からのご意見も含めまして、市立高等学校の強みや独自の価値、市立高等学校に果たしてもらうべき役割、そういった観点からご意見を伺いたいと思います。

(鶴見委員)

誰にとっての魅力があるべきかというところが、議論としてまずあると思います。例えば中学生に対する、これから入学する人に対しての魅力もあるでしょうし、卒業した後の人間としての魅力もある。自分のような経済界の人間としては、良い人材を育成してもらいその方が入社して活躍いただけることも魅力である。

その中でもやはり、まずは学校の魅力が中学生に伝わらなくてはいけないと思っているので、中学生がどういうところに魅力を感じるかを整理した方がいいのではないかと思います。

一方で、おそらく中学生の公立高校の選び方は、割と学力、偏差値、内申という点になっているような気もしています。その辺も何か課題があるのか。逆に市立高校の偏差値が上がってきている点で機能しているという、あえて整理が必要なのか、すごく議論として難しいと思って気になりました。

（宮崎委員）

誰にとっての魅力ですが、私は子供にとっての魅力が一番大切だと考えております。鶴見委員のご指摘の通り、資料3の15ページの入学理由のアンケートの「学力が自分に合っていた」、これが正直なところだと思う。本校の1年生も中学校時代に情報を得て、市立高校なら自分の学力としてちょうどいい、という視点で選んでいます。

ただ、本校の場合、運動部で裁量枠を設けております。裁量枠で入った子でも「難関大学」へ進学している子もいます。基本的に本校が「裁量枠」という特色ある制度を設けている効果だと思います。自分の学力に合っただけでなら、本校ではなくもう少しレベルの高い学校に行った子も特色があったため本校を選ぶことも起こっています。

また、P15の資料の2番目の「雰囲気、校風」。これも、市立高校なら「こういう校風があるから、私はその学校へ行きたい」という子もいるのではないかと思います。

（須賀委員）

6月第2土曜日に開催される萌葱祭という文化祭に大勢、中学生が親子で来ます。また夏休みの中学生一日体験入学でも、ものすごい数の希望者がある。例えば、中学1年生でお母さんと一緒に萌葱祭に来た中学生から、「公立学校なのに設備も整っていて、いろいろなイベントもあって、すごかった」という感想を聞きました。「もっと勉強を頑張らないと」とも言っていました。実際、学校を見て「この学校へ行きたい」という中学生が大勢いるのではないかと思います。

（野秋委員長）

中学生や保護者の皆さんの意見を耳にすることありますか。

（守屋委員）

学校を選択する際は、学力は大きな部分を持っています。先ほどから意見が出ている文武両道ではありませんが、自分を学力以外の面で生かせる、その一つが部活動であったり、学校の特徴であったりします。しかし、昨今、私立高校の人氣が上がってきていることも事実で、私立高校の方が特色を明確化してくると

ころが増えてきた、いう感触はあります。県立・市立の学校よりも私立がそういう強さを持ってアピールしてくる。学校説明会も夏休みも行われるわけですが、子供たちはそういう特色をいくつかつかみながら見学して、高校を選択していく時代に入っていると思います。

保護者から見た目線も今は大きいと思います。というのも、生徒が保護者と一緒に見学することが当たり前になっています。昔はそういうことなかったのですけれど、保護者と生徒が一緒に見て、それに対するアピールが大きく影響すると思っています。

（加藤委員）

誰にとっての魅力ある学校かと言ったら、それは生徒と保護者だと思います。生徒のアンケート結果や校長先生がおっしゃられたように、学校の雰囲気、それから部活動というのが本当に大きいと思います。実は横浜国立大学の附属学校も、いわゆる附属学校改革を進めていて、横浜中学校が部活動を廃止し、中体連を抜けました。すると志願者が減りました。附属鎌倉も中体連は抜けませんが地域展開を進めていて、志願者が減ることを心配しております。まだ部活動に対する生徒と保護者のニーズがあって、先ほど校長先生からもお話がありましたが文武両道、それから人間性の教育、部活動も勉強も頑張るという校風は、ぜひ大事にさせていただいて継続してほしいと思います。

一方、倍率が下がっています。浜松の公立高校はほとんど定員割れしていることにびっくりしています。これだけ定員割れする高校が増えるのであれば、静岡県全体の中で再編統合や定員の見直しを考えていかなければいけないと思います。神奈川県は再編統合等、どんどん進めています。私はそういう仕事を若い頃から任されて、取り組んできました。そのたびに反対運動が起こり大変な思いもしましたが、学校数定員数が適正なのか、というところが大切だと思います。浜松市立高校は前年が1.16ぐらいまで下がった。それは静岡県全体で減ってきているわけだから、ある程度仕方ない部分もありますし、入ってくる子供たちの能力が下がっておらず、模試結果も進学実績も伸びているのであれば、そこまで気にする必要はないと思いました。

保護者のニーズは、進学実績が大きいです。文武両道を目指し、子供たちの資質能力を高めるための取り組みを充実させていく必要があります。具体的には探究学習を中心とした学習指導ではないでしょうか。

（宮崎委員）

加藤委員のおっしゃったとおり、受検者数は毎年減ってはいるのですが、質は落ちてはいない。今日の資料には出ていないのですが、このとき取ったアンケー

トの中で、2年生と3年生に「市立高校のここを改善すれば素晴らしい」という項目がありました。1番目は、「生活のルールやマナーは、生徒の自主性が尊重される」、伝統と校風を受け継ぐところになりますが、自主性が尊重されると、もっと良くなるのではないかと。2番目が、「一般入試を勝ち抜くための受験サポートを強化してほしい」と、保護者と子供自体も望んでいるので、強化をしていかなければいけないと感じています。本校職員に、こういう高い望みがあることを伝えておきたいです。

（鶴見委員）

私立の学校の方が受験のサポートや進学へのサポートをやっているイメージがあります。今回の議論である私立の学校、他の県立学校と比べて魅力を出していく点でいうと、私立にその部分で勝てるのか、私立よりもっと魅力を出せるのかといったところはどうなのでしょう。

（野秋委員長）

今の浜松市立高等学校が「何が不足している」というわけではなく、「より魅力を出していけるのではないかと」感じています。

（亀井委員）

市立高校出身のゼミ生を持ったことがあり、その学生は学びの態度がしっかりしていて、就職も自分の望むところに行きました。大学での成績も、設計の分野で非常に優秀でしたし、就職して今も活躍していると聞きます。私は、個人差も当然あるとは思いますが、高校生活の中で何か基本的なところがしっかり育っていたと思っています。そういう意味で、15ページのアンケートの中で、「将来の夢の実現に繋がる可能性を感じた」というお話ではありますが、先ほどの保護者にとってのアピールで、第一段階目として大学はあると思うのですが、その先の「社会に出てどんなふうに関わっている」という部分でフィードバック、例えば「地元に残って関わっていて、このネットワークが有益に関わっている」「他の市町に出て関わっているが高校時代のその基礎的な部分が部活も勉強も両方頑張ったことで培われたこと」というようなフィードバックがあると非常に魅力的です。

（野秋委員長）

地元に限らずでもいいのですが、社会の中で関わっていくという視点で言ったときに鶴見委員から見るといかがでしょうか。

(鶴見委員)

亀井委員がおっしゃるとおりで、すごく対応力が高い学生、前向きな学生が多いイメージがあります。当社も今、総合職で言うと4分の1ぐらいは市立高校卒業生が占めていて、ぜひ入ってもらいたい社員の出身高校には間違いありません。

また、感覚、印象ですが、Uターンしてきてくれている子も多い気がします。東京等での就活イベント等でも話かけてくれる学生の数も市立高校のOB・OGが多いイメージがありますが、何かそういう施策をされているのかお聞きしたかったです。浜松市の魅力を知る活動のようなものがあるのでしょうか。

(野秋委員長)

本市としたら、若者の流出は大きな問題ですので、大学に出ても戻ってくるといところで、今、他部・他課の方でもやっているところです。

(オブザーバー 鈴木労働政策課長)

我々労働政策課では、流出抑制はもう致し方ないので、いかにしてUターンで戻ってきてもらえるかというのを考えています。それに向けて、小学生から高校生までの間に、どれだけ地元の産業、企業を知っていただく機会を提供できるか。なんとなくイメージを抱いて県外の大学に行く、だが就職のときには、浜松に戻ってくるといところも少なからず考えていただく際に、浜松の企業、「そういえばあんな企業もあったな、こんな企業あったな」というようなイメージをできるだけ植え付けていきたい、と取り組んでおります。

それを今、浜松商工会議所さんと私どもで連携しながら、地域の企業さんのご協力もいただきながら、取り組みを進めているといところですよ。

(野秋委員長)

そういった浜松市としての希望もありつつ、子供たちがどう羽ばたいていき、どういう人生を歩みたいか、という点を当然第一に考えるべきだと思うわけですよ、何か高校からいかがですか。

(宮崎委員)

総合的な探究の時間で「浜市総合講座」をやっています。何年も前から本校では、1年次に「浜松学」という、浜松市がやっている「浜松学」と言葉は一緒ですよ、中身は若干違うものを行っています。同時に職業探究を進めています。それが今年度、浜松商工会議所ともタイアップもしながら、広がっていつている。2年次になって「政策提言」で市の状況を子供たちが調べ、自ら考えていく取り組みを行っています。これも昨年から市と連携を密にして、市の方から情報等を

聞きながら、子供たちはそれに対して課題を見つけながら進めている。昨年は、更に市議会議員の方とも座談会を開く中で、浜松市のことに触れる機会が増えている。これらが間接的に影響あるのかもしれませんが。

先ほど鶴見委員がおっしゃったように、地元企業に市立卒業生は多くいると聞いて、それらが繋がっていると思いました。私も数年前の話ですが、教員採用試験に関わっていた際、浜松市立高校卒業生が非常に多く採用されるため、「教員は多い」と思ったのですが、企業もそうなっていることに驚きました。

（加藤委員）

今、校長先生から総合的な探究の時間の講座という話がありましたけれども、まさに浜松市唯一の市立高校の強みだと思います。市の行政と直接繋がる。これが県立だとたくさん学校があるので連携するのも大変ですが、市立高校が1校でするので連携がしやすい。それから市立高校でするので市立中学校も繋がります。総合的な学習の時間を中学でもやっていますので、例えばそこで研究したことを市立高校へ持って行って、中学校から高校へ、継続して探究をしていくということも可能になる。それに浜松市が絡んでくると、良い探究の時間になるのではないかと思います。

あと、質問なのですが、令和7年度から市役所と連携し、各課の職員が講師となり、業務概要の説明や生徒の提言の中間発表時のアドバイス、最終発表時の講評を行ったということなのですが、これは、各課の職員が講師となって1回、それから発表のアドバイスで1回。2回だけということでしょうか。

これも集中的にあると、もっと子供たちの探究心に火がついて、良い教育ができるのではないかと思います。

（鶴見委員）

企業側からしても、学生が浜松の企業を知らないということだけはないようにしていただけたらと、思う。魅力ある会社はたくさんあり、業種もいろいろあります。

企業だけでなく、浜松での暮らし方、生活、観光もそうです。そういった内容を浜松市立の高校として、高校生にアピールを強化していただければ、良い学生が戻ってきてくれる。そういった流れに繋がっていくと思います。

また、学生を増やすという観点からしても、親の存在は大きいと思います。親や親戚がOB・OGだったりとかすると、「ここには行った方がいい」と言ってくれたりする人がたくさんいる高校だと思います。学校生活でも楽しく過ごせた結果、良い思い出をもって卒業してもらおうといった環境づくりも併せて検討していただくとなお良い循環になっていくのではないかと思います。

加藤委員がおっしゃった、浜松市と兼ね合いは、初めて知りました。この資料を見て、中学生に対して例えば「市立高校に入ると、こういうことができるのか」「こういう活動をやっている、将来役立つ」ということがアピールできると、更に「入りたい」という気持ちが出てきて、私立との違いに繋がってくると思います。一番の違いは「市立」だと思うのです。県立とは違う。浜松市として連携、産業界との連携というところでもいいのではないかと、思いました。

（宮崎委員）

商工会議所主催で今年の6月11日に本校の1年生が参加した「ジョブE X P O」は、生徒から「企業を知らなかったから本当に良かった」というような感想が多かった。参加してよかったと思いました。

（野秋委員長）

市立高校はまだ共学化して20年ぐらいですね。その前は女子高ということで、今の中学生の保護者のお母さん、更にはおばあちゃんも含めて3世代が市立関係者というケースもあるかと思います。そのあたりで何かお感じになることはありますか。

（須賀委員）

126年という伝統校ですので卒業生も4万人を超えました。もちろんお亡くなりになっている方も大勢いらっしゃいます。しかし高等女学校卒業でご健在の方もいらっしゃる。昔は市立の先生も新卒で入って定年まで市立高校に勤務という先生が何人かいらっしゃったので、親子で同じ先生に教わった、とのことでまた話が盛り上がりまして。1学年50人10クラス500人の時代が長かったので、女子生徒のパワーというか、「自分たちでやっていくぞ」というものが意外と強く育っている。男子生徒が入ってからは様子も変わりましたが、リーダーシップを取っていくこととか、発言もできる。先輩方では、浜松の大きな企業の経営者ではなく、経営者を支える奥さんが割と多い。それ以外に、学校の先生も校長先生になられるなど、現場に大勢いらっしゃいます。ご自分の「お母さんもそうでした」「お姉さんもそうでした」とかご親族がいらっしゃる。

5年ごとに同窓会で会員名簿を発刊しているのですが、2024年に連絡が付かなかった人たちは除きますが、浜松の中央区に同窓生が14,500人もいます。浜名区には3,000人いますし、天竜区にも200人もいます。だから浜松市全体で1万7700人ぐらい、卒業したばかりの18歳からもうかなりお歳の方までいるのです。湖西市も磐田市にもいる。地元にも意外とい入るのです。

ただ、大学で都会に出ます。東京とか名古屋、大阪に出て、浜松の企業に戻ら

ずに、例えば東京でお勤めするのだけれども、10 年も勤めると、疲れてしまつて、「浜松はいいよね」という話になる。しかし帰ったときに、途中で入れる企業があるだろうかと特に女性の場合心配をしている。卒業して新卒ですぐ戻るのならば、またそれはあるでしょうけれど、ご家族が「そんな大変な状況で暮らさなくても、浜松に戻ってきなさい」と言っても「だって仕事がないじゃない」という現状があるようです。もちろん商工会さんなど、皆さんPRはされていると思うのですが、浜松で暮らすことの安定感だとか安心感を紹介できることが人生を変えていくことになると思います。

授業ということでは、学年 360 人で全学年9クラスということは、先生方が大勢いらっしゃって、ものすごく恵まれていると思う。これが高等学校で1学年3クラスしかないとしたら、当然先生の配置人数は少ないです。その状態では先生方の余裕もなく、生徒もいろんな教科以外の勉強をする機会は当然限られてしまう。そういう意味では市立は恵まれていますから、ある程度の人数というのは必要かと思います。これからだんだん定員もクラスも減らされる、もう現実で減らさなきゃならない時代が来てしまっていますけど、先生方が揃っていて初めてこの学校で勉強したことが自然に育てられている。いずれ社会人になったときに育てていることに気づく。

例えば全校生徒が講堂に1,000人揃って行事が始まるときに、「今からさあ始まりますから静かにしなさい」なんて一切ないです。定刻になると一斉に静かになって始まる。その場に入ってはじめて1年生は先輩の態度を見て、何でもないことの場面で訓練される。さっきの校門一礼もですけど、何でもないところで人間性が鍛えられる。勉強以外のそれでいろいろな行事に対して2年生3年生が一生懸命やっているところを1年生が見て、「おっ」と思う。1学年に360人もいたら、当然いろいろなタイプの生徒さんが集まっていて、今まで地元の中学で人数が少ない中で暮らしていた子たちでも、この学校に来ることとても刺激になって、また勉強にも結びついていく。そういうことが大切です。

同窓生の力みたいなもの、普段はそういうものは感じないと思います。例えば遠州鉄道に入った、そして「この人も市立だった、この人も市立だった」ということに改めて気がついて。そのいわゆる「市立生」だったというブランドにそこで初めて気がついて「自分は卒業してよかった」と思えることもあるでしょう。

(野秋委員長)

続いて協議の2「市立高校が目指す姿」についてご意見いただきたいと思います。今のお話を受けて、育成すべき人間像、目指す高校像、これらについてのご意見を伺いたいと思います。

(守屋委員)

市立高校に中学校から送り出す子たちは総じて優秀な子たちです。学力や人間力を持っている子が集まる、そうした魅力を持っている。社会の中で活躍できる人間性が育つ学校として、昔から「市立ブランド」を持っていると感じています。

ただ、私立も力を入れていて、少子化の流れもあって、ここは少し危機感を持ちながら進めていく必要性はあります。その中で本当にイメージできる人物像、学校像が具体的にあると強みになる。具体的に「これが」というところを、議論をしながら教えていただきたいと思います。

中学校側からすると、先ほどお話を聞かしていただきながら、礼節は大切なものですし、コミュニケーション力、社会の中でやはり活躍できる資質も磨いていけるということが分かっていると、より安心して生徒を送れます。先ほど探究学習の話がありましたが、それは非常に魅力を感じますし、今社会に出ても、そういう社会性、人間性を生かしたコミュニケーションの力で進んでいく会社、大学の入試が変わってきていることもある。そういうところにも繋がる、魅力ある学校像をイメージできると、より強みが出てくると感じます。

(野秋委員長)

やはり人格というか、そういうところは本当に申し分ない子たちが来ています。そこに世界で活躍できる力としてのコミュニケーション、それが一つあるといいと思います。

(宮崎委員)

自分も今、迷っていることがありましたが、守屋委員がおっしゃった、中学校側がそういう意図でいるのなら、このまま進んでもいいのかなと感じました。

アンケート以外でも、例えば出前授業、市立高校の先生が中学校で教えて、そこで感想を聞くのですが、感想の中に「私は市立でついていけるか心配です」など内面的に不安を感じている。学力は多分高いのだけれども、「『市立』というと、敷居が高いのでちょっと遠慮をしている」という声も聞かれます。本校は「規律ある進学校」という目標で、人間性も重視している。しかし今の時代、逆に子供たちにプレッシャーをかけすぎているのか、ということも感じていました。

今度、先ほど出ました7月30日に、1,000人規模で中学3年生が集まる体験入学がありますが、校長の挨拶でどういう挨拶したらよいか悩んでいました。しかし、やはり市立高校は期待されている。我々もその部分を大切にしたいところです。自信を持って発言していきたい。今のところは文武両道の教育理念のもと、学業と人間性の両面においてバランスのとれた人物を育てることを進めて

いきたいと思います。

（鶴見委員）

今お話をしていると、お2人の話にはすごく共感、同感します。まず学力だけ、というのではないと思っています。社会人、サラリーマンからすると礼節など、礼儀の部分、コミュニケーション能力は、頭の良さよりも、むしろ重要と思っている。そこはやはり市立高校としてのポリシーだと思いますし、個人的にはすごく良い伝統ではないかと、外から見ても思います。卒業生の社員を見ていても思います。

あとは「差別化」というところ。市立と県立の差別化で言うと、浜松市との連携が、どういう形でできるか。それによって生徒がどういうふうな成長していくかというところを具体的に見られると良いと思いました。

生成AIが発展・発達をしていく中で、求められる人材像は、どんどん変わってくると思います。社会の構造も変わっていく中で、問いを立てられる人とよく言われますけど、そういった人は必要とされますし、人と接触する仕事というのはなくならないとは思いますが、そういったコミュニケーション、礼儀は学力とともに意識していた方がいいのではないかと思います。

（加藤委員）

目指す姿ということで、先ほど校長先生もおっしゃられた文武両道、ありきたりの言葉で昔からある言葉ですが、これはすごく難しい。だからぜひ浜松市立高校では、単なる文武両道ではなく高いレベルの文武両道を目指してほしいと思います。

今いろんな話を聞いていると、浜松市内で活躍されているOB・OGの方、例えば市議会議員だとか、経営者もいるのだと思います。やはり企業に入って、例えばリーダーになっていく人が大勢いるのではないかと思います。そういったときに大事なことで、先ほど鶴見委員からもありましたけれども、他者に対しての思いやりの気持ちを持ち、社会に出て、例えば弱者がいたら手を差し伸べることができる心優しいリーダーを育ててほしいし、そういう生徒を育てることを目指してほしいと思います。

あともう一つは学力。保護者は進学実績をやはり見ていると思います。ただ、先ほど言った他者を思いやる気持ちや優しい心の方がずっと大事だと思います。

浜松市立高校の強みは文武両道です。進学実績も大事にしつつ、人間性の教育を重視していくというスタンスを目指していけばいいのではないかと思います。

（亀井委員）

学生たちを見ていると、自分できちんと判断していける力、そのあたりは非常に大事になってくるので、出していただいているキーワードはやはり重要であると思いました。

何か目指すときは、ソフトの方が大事で、「施設なんて」というところはあるのですが、例えば老舗でブランド力がある私立高校であっても、施設の魅力がなくなってくると、割と直接的に人気に跳ね返るところがあって、その辺は過敏に反応されている学校もあります。先ほどのアンケートで浜松市立高校は「清潔感がある」というところにすごく票が集まっていたので、そのあたりは学校でしっかりされている。改修の際には、平面計画の骨格は余裕のある校舎だと思うので、その特性を生かしながら、手を入れていく必要があるのだろうなと感じました。

（野秋委員長）

おっしゃるとおりで、そのあたりは次回以降も様々ご意見いただけたらと思っております。外から見るのと違う状況を教えていただけたらと思います。

（宮崎委員）

校舎は落成してもう 30 年ですので施設は修繕した方がいい面はいろいろあると思います。施設の話が出ましたので、お話させてください。

本校は部活も盛んですが、部活の活動が少ない子供たちが、放課後、図書館や進路資料室で黙々と勉強をしています。例えば、先日期末試験が終わったのですが、この期間には朝から黙々と、部屋がいっぱいというような状態で自習をしていました。生徒主体がグランドデザインで大きな柱の一つになっています。学力、学習では主体的に子供たちはやっているの、施設を今度改修するときは、自習室的なところがうまく機能できるとよいと思いました。

高校の先生とよく話すのですが、「学校の自習室」の特徴は、同じ学校で同じ学問を学んでいる仲間たちと疑問を投げ掛け合う、ディスカッション、協議をする、そんなことができる自習室があった方がいいと。生徒自らが「ちょっと議論しようよ」「わからないから教えてよ」とか、そういう自主性を持つ学校ですから。

（鶴見委員）

浜松市との連携からかもしれないですが、地域を良くしたいとか、地域のために頑張りたいとか、そういった思いを教育の中で埋めていただくと良いと思います。

また、せっかくその良い活動をされていても、プロモーションが本当にターゲ

ットに届いているのかが分からないので、市民の皆さんに対しても、「市立高校でこんなことやっていて、例えば地域の課題、こんなことを学生目線で解決していて」など、宣伝していくことによって変わっていくこともあるのではないかと思います。どうしても活動がクローズド、中だけでやっていることが多いのではないかと思いますので、「いかに宣伝をしていくか」ということも考えるべきだと思います。

（須賀委員）

そうした意味では『いちりつプレス』ですが、協働センターに置いてあります。市立高校が発行している一例ですけど、一般市民の方が手に取れるようになっています。

（宮崎委員）

ほぼ毎日、ブログもやっています。鶴見委員が言ったように、「市立はこういうこともやっている」ということを発信するのは本当に大切だと思う。これからの時代は、そこにも力を入れていかなければいけないと思います。

（野秋委員長）

私自身が中学の教員だったことを思い出すと、中学生に対する進路指導で「唯一の市立高校です」という進路指導は正直なかったです。そういう意識のさせ方は、確かにできてなかったと思います。

唯一だからこそというところを、今までの実績に加えてアピールできるように、今もあるもの、これから加えていけるものがあると、より中学にはアピールできます。

（鶴見委員）

そういう思いを持って入学してくれば、卒業するときに、更に思いが強くなって、結果、浜松にまた戻ってきたいと思ってくれるというような、そういう循環にもなるかもしれない。

浜松が好き、という人は想像以上に多いと思う。

（須賀委員）

そういう方は多いと思うのですが、さっき言った「お仕事がないだろう」みたいな、そういう層は知らないだけですよね。

(鶴見委員)

意外とプロモーションが重要なと思います。

(須賀委員)

浜松はすごく便利じゃないですか。新幹線で、東京に遊びに行こうと思ったら、日帰りで夜遅くまで遊べますし、空港だって羽田、成田はちょっと遠いですが、セントレアまで行けば世界中に飛び立っていける。意外と夜は星空も綺麗に見える、みかんも美味しいし、牛肉も美味しい、というふうな、そういう意味では実は、浜松は恵まれている土地だと思います。

(野秋委員長)

加藤委員、横浜というと、浜松とは全く規模も違う都市ですので、地元に戻ってくるとかそういうことはあまり心配ない中で、市立の高校は運営されているところが多いのだろうと思うのですが、政令市浜松唯一の市立高校が今後力を入れていくべき、というものを教えてください。

(加藤委員)

私は県立高校で仕事をしていました。県立高校があって、横浜市立があって、川崎市立があって、それから横須賀市立もあります。さらには私学では聖光学院、栄光学園、浅野、慶応などの名門がたくさんある。はっきり言って競争です。

神奈川の県立だと、どんどん統廃合が進んでいます。横浜市立もやはり県立と競争になるので、横浜市立もいろんな施策を打っていて、例えば横浜市立南高校は、元々は8クラスぐらいあったのを4クラスにして中高一貫にするなど、改革をしていったという歴史があります。川崎市立も中高一貫校を作りました。定時制廃止などの改革をしていきました。

浜松市立の高校は1校ですので、まず視点としては県立高校と交流はあると思うのですが、そこで競争ということも意識をしなければいけないと思います。それは目に見えるところだと進学実績になりますが、見えない資質能力では他者を思いやる気持ちだとか心の教育をどんどん伸ばしていく必要があると思います。

強みとしては浜松市で1校しかないので中学校との連携もしやすいし、市の行政との連携もしやすいというところを生かしていくといいと思います。

(野秋委員長)

今、文部科学省では普通科改革がありますがそのあたりはどうですか。

（加藤委員）

文部科学省では「N-E. X. T ハイスクール構想」を進めていて、莫大なお金を、何十億と各県に配分すると発表しています。普通科の中でも特色をどんどん出していかなければいけない。神奈川県は再編統合を進めているのですが、それに加え、例えばシチズンシップ教育に係る研究の教育開発校、総合的な探究の時間の研究指定校、学習評価、授業力向上、ＩＣＴ利活用プログラミング、確かな学力、学力向上進学重点など普通科でも特色をだしています。横浜翠嵐は学力向上進学重点校で、学力向上進学重点校８校、エントリー校１０校計１８校をいわゆる護送船団のような感じで、翠嵐が先頭を走ってくれ、という教育長からのミッションを受けています。だから、結果を出さなくてはいけないというプレッシャーがあります。

神奈川や東京は競争です。そのため東京の日比谷を見に行きましたし、大阪の北野、それから職員を各県の私学も含めたトップ校に視察に行かせ参考にしました。心の教育、人間性の教育を大切にしつつ競争する部分もないと、私学に志願者を持っていかれるのではないかと思います。

（守屋委員）

県立と市立を区別しているかと言われると、中学校ではそんなに区別をしていません。ただ浜松は、進学校で有名な浜松北高があります。市立高校に送り出している子たちが決してそういう学校と比べて、何か足りないか、というと全くそんなことはない。大学でも社会人でも活躍できるだろう、と思っています。そういう面で市立高校が個性というか、強みをやはりどう出していくか、というところが大きいと思います。今日の議論は非常に勉強になりました。

一つは浜松市立中学校が市立高校と繋がりがやすいという点があって、例えば教育委員会が企業のトップの特別授業をしてくれています。全市立中学校に毎年１回入れていただいて、浜松の有名な企業の社長さんが実際に子供の前で講話をしてくれる。これは地元へのリターンを考えても意義が大きい、年々浸透してくるのではないかとと思っている。そういう面で市の魅力を発信しながら繋がっていく。中学校でも浜松の良さや今の企業からの企業家のお話などについての学びを含め、市政に関わることを総合的な学習の中でもやっているのも、市立高校に行けばそれがもっと深められる、伸びる、というところは魅力のひとつになると思う。

中学校での進路指導も生かせる。それで先ほど宮崎委員が言っていたように、自習室の学び方も快適に過ごせる場所が市立高校にはあるというところの魅力を感じるのですが、そういう所で、子供たちは総合の学びを深め合えるような場面があり、商工会の方に頼んで、そこに講師を呼べる時間を作ってさらに深め

ていくというようなこともやって、自分たちの学びがより深まっていくような、社会に生きるという面で力をつけていく。それがもちろん国際的な、世界的に活躍して、もちろん後でまた浜松市に戻ってくるとか、そういうこともできるような学びに繋げていくといい。

もう一つのキーワードは、今日でてこなかったですが、浜松は「やрмаいか」という言葉があつて、挑戦するとか、その意識を持って学べる。「やрмаいか」という土台が、子供たちや大人も皆さん持っているので、そういう面を生かすところも、市立高校にあると良いと思います。そういうふう発信してもらえたりすると、より魅力、独自性があるという観点があります。

（野秋委員長）

ご発言いただきありがとうございました。伺えばまだまだご意見が出てきそうなのですが、時間が迫ってまいりました。前半とそれから今までの議論と全部合わせると、こういう学校、こういう生徒を目指していくといいのではないかというのが見えてきたような気がします。事務局の方で、次回に向けてこれまとまして、繋げていけたらと思います。ありがとうございました。

（鈴木教育総務課長）

以上で、第1回浜松市立高等学校の在り方検討委員会を閉会します。